

試し読み版

上田ながの

表紙イラスト：クロメトカゲ



魔法少女

テックメン

TEKKAMEN!

二次元ぶち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔法少女テッカメン!』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



魔法少女
テツカメシ
TEKKAMEN!

上田ながの
表紙／クロノトカゲ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

きみしまゆみ か

君嶋弓佳

ある日魔法界から転送されてきた魔法の鉄仮面を入手し、それ以来魔法少女テッカメンとして世の悪党と戦うことになった女子校生。

ドリー

魔法の鉄仮面に宿った人格。魔法界で悪さを働いた為に、鉄仮面に封印され、人間界で善行を積むまでは元に戻れないという呪いをかけられている。

メルエル

魔法界からやってきた魔法少女。魔法界時代のドリーに虐められた過去があり、復讐にやってくる。

「なあなあ山岸^{やまぎし}、昨日の話聞いたか？」

「昨日？ ああ、もしかして魔法少女テッカメン？」

魔法少女テッカメン——その名が山岸くんの口から出た途端、君嶋弓佳^{きみしまゆみか}は丸みを帯びた瞳を見開いた。同時にビクツと肩を震わせた為、肩の辺りで切り揃えた髪が揺れる。

「そうそう。昨日も大活躍だったらしいな。ああ、見たかったなあ。お前だって見たいだろ？」

クラスメートが矢継ぎ早に山岸くんに言葉を投げっていく。受ける山岸くんはウンウンと頷いた。

「もちろん。前に一度だけ見た時さあ、ホントにカッコよかったし。もうあれだけでファンになっちゃって。うちの学校の生徒かと思うと、ちよつとドキドキもするし」

「やっぱそうだよな」

何気ないクラスメート同士の会話である。が、弓佳にとってはそれ以上の意味を持つものだった。

少女は思いきり口元を緩め、カバンにぶら下げている鉄球を手取る。大きさは卓球玉程度。模様は何一つついておらず、女子学生が持つにはあまりに無骨な代物だ。

「ねえ聞いた？ 山岸くんがテッカメンのファンだって。ど、どど、ドキドキするって」
そして小さいながらも喜びに震えた声を掛ける。

「はいはいよかったね」

すると頭の中に返事があった。答えたのは弓佳が持っている鉄球である。名はドリー。魔法界で悪事を働きすぎた為に追放されてきた魔女だ。悪事といっても（自己申告による）ほんの悪戯程度だったらしいが……。追放刑を受けた際、この鉄球に封印されてしまったらしい。

彼女が元の姿に戻り魔法界に帰る為には、人間界において悪さを働く魔法使いや魔女を百人捕らえねばならない。もちろん鉄球のままでは何もできないので、協力者として弓佳が選ばれた（偶然道端に落ちてたドリーを拾ったからでしかないが）。

魔法少女テッカメンというのは、弓佳がドリーの力で変身した姿の事である。変身呪文「ヴォルセットテッカ」を唱える事により、ドリーと融合するのだ。

「はいはいって何よ。冷たいわねえ」

「冷たいって……じゃあなんて答えればいいのかよ。大体弓佳は喜びすぎなの。山岸くんがファンっていつでも、あんたじゃなくてテッカメンのでしょ」

「うっ！」

それを言われると弱い。因みにテッカメンの正体を知るものは誰も居ない。変身しても制服は変化しない為、この学校の生徒である事だけはばれてしまっているが。

「そ、それでもさ。わ、私とテッカメンは同一人物なわけだし」

「誰も知らないけどね」

馬鹿にするような言葉。

「も、もうあんたはっ！」

一々腹立たしい受け答えに、つい弓佳は声を荒げてしまう。

「ち、ちよつと弓佳！」

ドリーに諷められた時には総てが遅かった。ハツとして辺りを見回すと、クラスメート達の冷たい視線が……。もちろん中には山岸くんのも含まれている。

「ゆ、弓佳……。あんた大丈夫？ な、何か最近様子が変よ」

親友の霞かすみが本当に心配そうに顔を覗き込んできた。

「べ、別になんでもないわ。私は大丈夫だから……」

ハハッと乾いた笑いが教室内に響く。

※

そんな出来事があつた帰り道。弓佳の機嫌は完全に回復していた。鼻歌なんかを歌い、スキップをしながら駅前広場を家に向かって進んでいく。

「回復早いなあ」

「まあね。だつてさだつてさ、確かに冷たい視線を向けられちゃったけど、山岸くんが私のファンで、ドキドキするのは事実だし」

「だしい〜って……ま、いいけどね」

ドリーは何やらいいたげだったが、それ以上突っ込んでくる事はなかった。面倒臭くなつたのだろう。

ドッゴオオンッ！

という爆音が駅前広場に鳴り響いたのは、その瞬間の事だった。

「な、なにつ!？」

慌てて爆音が聞こえたほうへ振り返ると、広場の中心に立っていた木が炎を上げている。そしてその脇には、どう見ても十代前半くらいにしか見えない少女が立っていた。

金色の長い髪をヘアバンドで留め、広いデコが目立つ。頭の高さが小柄な弓佳の肩まで辺りしかなかく、かなり小さい。瞳は猫のように吊り上り、活動的な印象を持たせる。服装は黒のワンピース。身長の小ささに比例して、胸もほとんどない。寸胴の幼児体型だ。そこが可愛くもあるが。

「ふふふ、か弱い人間どもめ。聞くがよい！」

少女は腕を組み、満足げに燃え盛る木を見つめながら、呆然と広場に立ち尽くす人々に声を掛けた。小柄な身体に似合わぬ声量で、辺り一帯に響く。

「ボクの名はメルエル！ ドリー、いや、魔法少女テッカメンを抹殺する為にこの地を訪れたものだ！ さあ、テッカメンを呼び出せ。呼び出さねば、ここら一帯が地獄と化す事

になるぞ！」

言うなりメルエルと名乗った少女は腕を振る。途端に周囲に立っていた街路樹が燃え出した。人々は悲鳴を上げ、辺りに屈み込む。

「な、なんなのよお！」

そんな光景を見つめながら、弓佳は思わず頭を押さえた。折角いい気分だったというのに台なしである。

「メルエルかぁ。参ったな」

そうしていると、ドリーが溜め息混じりに呟いた。何だかあのデコ少女について知っているような口振りである。その事を訊ねると、

「いや、あたしが魔法界にいた時にさあ。散々あいつの事苛めたんだよね。あいつ妙にプライド高くて、からかうと面白いんだよ」

だから一日中下痢が止まらない魔法を掛けたり、歩くたびにおならが出る魔法を掛けたりしてからかかっていたらしい。酷い。

「そ、そりゃ何かあの娘の気持ちも分からないでもないかも……」

などと呟いていた時、怯える人々を見て笑うメルエルの前に一人の少年が立ちはだかった。山岸くんである。偶然この場に居合わせてしまったらしい。

「や、やめるんだ！ こ、こんな事をしていいと思ってるのか!？」

目の前で見せつけられた魔法に恐怖を感じているのか、声や身体が震えていた。メルエルはそんな山岸くんを詰まらなそうに見つめると、軽く腕を振る。

「うわっ！」

途端に彼の身体は何かに殴られたかのように、二、三メートルほど吹き飛ばされた。

「人間風情がボクに語りかけるな」

痛みで震える山岸くんに対し、メルエルは冷たく言い放つ。

「あ、あいつっ！ よ、よくも山岸くんに！ 許せない」

無惨に痛めつけられる山岸くんを見て、ジッとしている事など弓佳にできる筈もない。片思いの少年に向ける熱い瞳に怒りの炎を滾らせながら、カパンにキーホルダーのようぶら下げていたドリーをブチッと引き千切った。因みに周囲の人間はメルエルの事ばかり見ている。

「行くわよドリー！ ヴォルセット！」

「ちよ、あたしは面倒臭いのはごめ——」

ドリーの言葉を最後まで聞かず、鉄球を頭上に向かって投げ、変身魔法を口にした。

「テッカアアアアアアアアアアアアッ!!」

パアアアッ！

途端に鉄球から魔法の光が放たれ、弓佳の身体を包み込む。

「な、なんだあ？」

夕方から昼間に戻ったかのような明かりに、メルエルや野次馬達が一斉に視線を向けてきた。が、光の量が凄まじく、弓佳の姿を確認できるものはいない。

光の中で放り上げられた鉄球が大きさを増し、弓佳の顔をすつぽりと覆う。同時に凄まじい魔力が全身に流れ込む。身体中が熱を発生し、「はあつ」と熱い吐息が口から漏れた。自分自身の肉体が、まるで別のもののように変化していく。感じるのは力、力、力！ やがて光が消え去っていき、変身は完了した。

光の中から現れたものは、魔法少女テッカメン。学校のブレザー制服を身につけ、スカートを翻す。スカート裾からは白く健康的な足がスラリと伸びる。程よい形と大きさを持った胸元は呼吸のたびに前後に揺れた。魅力的な少女の身体であるが、何よりも人々の視線を引いたのは、その顔をすつぽりと覆う鉄仮面だった。

完全無欠な鉄仮面。瞳の部分にスリットが開いているだけで、後は鉄、鉄、鉄！ 一部の隙も存在しない。敢えて諭えるのなら、どこかの宇宙刑事——いや、宇宙探偵みたいな姿である。まさに魔法少女テッカメンを象徴する装備だった。

「テッカメン！」

倒れていた山岸くんが喜びの声を上げる。すると周りで怯えていた人々も、何度も魔法で襲われてきた街を救ってきたヒロインの登場に一斉に歓声を上げた。

弓佳はそれらの声を受けながら、ビシッとメルエルを指差す。

「貴女！ よくも街の人達や山岸くんを襲ってくれたわね。絶対に許さないんだから」
受けるメルエルは口元に余裕の笑みを浮かべ、

「出たなドリー。いや、テツカメン！ ボクが魔法界で受けた苦しみと屈辱。ここで晴らしてやる！ お前に相応しい辱めを与えてやるんだ。行けえ、火炎熱風地獄車あつ！」

何の躊躇ちゅうちよもなく魔法を放ってきた。メルエルの掌から、凄まじい火炎の輪が発射される。
「ありや結構上位の魔法だぞ！」

「分かつてる。でも、そんなものには負けないわ。テツカメンシィィルド！」

カキィィンッ！

突き進んでくる火炎輪に対し、弓佳も魔法を発動させた。巨大な盾が目の前に出現し、火炎輪を跳ね返す。

「馬鹿なっ！」

メルエルもまさか自分の魔法が弾かれるとは思っていなかったらしく、慌てて横っ飛びに火炎輪を避けた。炎は近くの木に激突し、木っ端微塵に吹き飛ばす。周囲の人々は必死で頭を抱えて屈み込んだ。

「逃がさないわよ。テツカメンランサアアアッ！」

バシユウッ！

回避によってバランスを崩したデコ少女に対し、弓佳は追い討ちを掛ける。魔法によって作り出されたランスが、黒衣の少女の身体を貫く。因みに弓佳の魔法は精神にダメージを与えるものであり、貫いたところで命に別状はない。

「ぐえっ」

それでも精神的なダメージはかなりのものらしく、メルエルは身体をふらつかせる。

弓佳がテッカメンとなつてほぼ半年。その間、何度も魔法戦を潜り抜けてきたのだ。メルエルも強力な魔法使いではあるが、実戦経験の差が大きかった。

「ぼ、ボクは負けない！ 熱風疾風炎熱地獄！」

それでもメルエルはめげずに魔法を発動させる。魔力によって発生した風に、炎が混ざり、テッカメンを飲み込もうと迫ってきた。

「わあ、駄目だあ！」

人知を超えた炎の波に、野次馬達からも悲鳴が上がる。が、炎を目の前にしながらも、弓佳は仮面の中で笑みを浮かべた。

「この程度で私は止められないわよ。貴女の炎ごと斬つてあげるわ。喰らいなさい！ テッカメンブレエエエエド！」

途端に鉄仮面少女の手に魔力の剣が現れる。純粹な力の塊。それを握り締めながら、炎の波に向かって跳んだ。向かつてくる奔流に向かつて剣を振り上げ――。

玩具のように弄ばれるテッカメンの姿に、やはり頬を染めたまま見つめてたメルエルが口を開き、突然魔力を開放する。

すると周囲で呆然とこの光景を見つめていた男達にも遠隔魔法が掛かり、更に数十本が口腔に転移してきた。しかも口だけでなく、掌にまで転移されてくる。はつきりと肉棒の姿が見えるわけではない。が、確実に掌に肉の熱を感じる。ある程度起きている事態の想像はできていたのか、半勃起状態だ。

「それは手で……し、扱いてやるんだ。分かるな？」

腕を組んで仁王立ちするメルエルの言葉に頷くと、ゆっくりと掌で握ったモノを抜き出す。掌に伝わってくる異物の熱気。一抜きするごとに、硬さを増していく。

「おうっ、な、何か俺……す、すげっ！」

広場の男達が一斉に腰を引き、顔を赤く染めている。中には空腰を振っているものもあり、一種異様な状況だった。見ているだけの女性達は、この光景に気味悪そうな表情を浮かべながら、弓佳に対して言葉を向けてくる。

「ねえ、テッカメンのあの手の動きって……」

「ま、間違いないよね。やっぱ魔法を使って……可哀想……」

確かに憐憫を含んだ言葉だった。可哀想というのも事実だろう。ただ、その瞳には間違はなく軽蔑の光も含まれており、

「よくこんな場所であんな事できるわね」

視線の中に込められた言葉が聞こえてくる。

それでも行動を止めるわけにはいかなかった。未だ山岸くんの首筋にはデコのナイフが突きつけられている。

「ん、んふっ、んちゅ、んむう……」

じゅりゅっ、じゅりゅっ！

自然と分泌されてしまう唾液を、舌を使って肉棒に塗りたくっていく。汁が漏れ出す先端部はできるだけ避けるようにしながら、カリ首から肉茎を舌尖でなぞる。

「おっく、と、とまっへえ！」

男達が勝手に腰を振り、喉奥を亀頭で突かれるのが辛い。そこで這わせていた舌を肉胴に絡ませて締め上げ、唇にも力を入れる事で何とか動きを止めようとする。が、舌を巻きつかせるにはあまりに肉棒は太く、力強い。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっ！

「だむえ！ おもっ、ごっごっごおっ！」

その上、舌で締め上げた事により強い快楽を感じたのか、男達は更に腰のストロークを激しくした。舌や口唇程度で押さえつけられるものではない。引き抜かれていく肉棒に引っ張られ、唇がひよっとこのように伸びてしまう。あまりに間抜けすぎる顔。

くちゅ、ぐちゅぐちゅ……。

奉仕は掌でも行なわれ続けていた。肉先から肉根まで、指で輪を作って何度も往復させる。半勃起だった肉棒も完全に勃起上がり、火傷しそうなほどの熱気を放つ。肉茎はまるで鉄のように硬いのだが、それでいて亀頭部は柔らかさを維持している。プニプニとした触感が気色悪い。

（うあ、やだ……私の指が……）

しかも、ワレメからは苦汁が分泌され始めていた。半透明の粘着液は、弓佳の細く白い指の一本一本に絡みつく。指を動かすたびにネチャネチャと卑猥な音が響き、糸が伸びた。口腔、掌に感じる燃えるような肉棒の熱気と、身体中を取り囲む吐き気を催させる発情臭に、自然と涙が溢れそうになる。学校を出た時には、こんな酷い事になるなんて想像もできなかった。

それでもドリーや山岸くんの姿を思い浮かべ、弱い考えを打ち払う。涙を堪える。さすがにこんな姿を山岸くんに見られていると考えると辛かったが……。

「んもつ！ ふうふうふう……にぎやい……」

ちゅぶ、ぐちゅ、じゅるるう……。

だから現実を忘れるように、男達への奉仕に専念した。肉棒の裏筋に舌を這わせながら、口腔粘膜と亀頭部を擦りあわせる。粘膜とカウパー液が混ざりあい、苦味が口腔中に広が

っていく。

「さ、最低の姿だな……。よくそんな事ができるもんだ」

いつの間にか弓佳の膝は僅かに曲がり、腰を引くような体勢になっていた。その姿勢のまま鉄仮面を前後に振り、左右の掌で肉棒を扱き続ける。スカートから伸びる白い足は、滲み出た汗でうつつすらと光って見えた。

そんな姿にデコ少女が腕を組み、頬を染めながら呟く。興奮しているのか、言葉の中には熱い吐息が混ざっている。山岸くんは金縛りの魔法を掛けられているらしく、メルエルの横に立ち尽くしていた。辛そうな表情を浮かべ、視線を外している。

「だ、だへのへいだとおもっへるの……。んよおっ！」

ぶじゅぐっ！

言葉に対して怒鳴り返そうとしたのだが、ペニスを啜えた状態では上手く言葉にならない。喉奥に肉先を突きこまれては尚更の事だ。

「げふっ！ げっ、うげえっ！」

不意打ちのように喉奥を塞がれた苦しみに、何度も弓佳は咳き込む。自分の状況に対する悔しさに心がどうにかなくなってしまいうるに感じる。ただ、それと同時に奇妙な変化が肉体に起きていた。

何故か身体が熱い。どうしても舐めざるを得ない先走り汁の苦味と共に、秘部がむず痒

くなってくる。

(どうして? どうなってるのコレ?)

変化の意味が掴めない。肉体の熱さとむず痒さの正体が分からない。

思わず太股をもじもじと擦りあわせてしまう。制服下の乳房も何故か敏感になっていた。柔肉から分泌された汗がブラに染みていくのが分かる。

「んぐ、んくんく、にがひのに……」

苦いのに何故か積極的に苦汁を舐め取ってしまう。

「まずい！」

弓佳自身も知らない肉体変化の正体に、ドリーだけは気付いていた。

ドリー達魔女が使う魔力の源は、人間の持つ精気である。つまり男達が分泌させる先走り汁は魔力そのものともいえた。だから舐めれば舐めるほど、テッカメンの魔力は上がっていく。

魔力が上がる事自体はそれ程悪い事ではない。しかし、限界以上に取りすぎると逆に肉体に影響を与えてしまう。下手すれば魔力に耐えきれず、肉体が内側から崩壊してしまうかも知れない。

「やめろ! もうやめるんだ! あたしの事は気にするな!」

ドリーが自分の行動を止める声が聞こえた。だが、そんな事はできない。ドリーをメルエルに渡すわけにはいかないし、山岸くんも救わなければならぬから。

「わはひはだひひようぶだから……んぢゅう」

啞えた肉棒を吸う。弓佳にとつて生まれて初めての口奉仕だったが、肉体は慣れ始めていた。それに舐めれば舐めるほど、苦かったペニスが何故か美味しく感じられてしまう。精気吸収による効果だった。

「ああ、も、もう俺……」

「やばっ！　そ、そんなに吸われたら」

肉先を頬肉に擦りつけ、カリ首に舌を巻きつけていると、男達が次々と限界を告げる。言葉にシंकクロするように、啞えた肉棒の亀頭が膨れ上がっていく。硬度と熱量も増した。口淫だけでなく手淫を受ける肉棒も同様の変化を見せる。先程まで半透明だった分泌液に、白濁したものが混ざり出す。

（大きい。大きくなってる？　なんなの？）

生まれて初めて肉棒に手を出す弓佳には、ペニスに起きている変化の正体が分からない。戸惑いながらもなす術もなく、膨張していく怒張に翻弄されるしかなかった。

「おっひ、おっひい！　あごが、もおっ、くもおっ！」

重ねた肉棒の大きさは最も大きなモノとなる。膨張したペニスは拳ほどの大きさがあり、限界以上に口が押し開かれてしまう。

「こ、こっかつかあ……」

顎が外れそうなほど辛い。呼吸を続ける鼻からは、限界以上に開いた口から逆流してくる唾液が鼻水のように垂れ流れる。

ガクガクと弓佳の膝は震えていた。扱く手も止まってしまふ。

「射精るよ。射精るよお」

が、男達は関係なかつたようだ。手淫が止まっても、自ら腰を振り、射精に向かって突き進んでいく。掌に男根の摩擦熱を感じる。

「お前臭いぞ。凄い臭いだ。鼻が曲がる」

発情臭はメルエルにも届いているらしく、黒衣の魔法少女はワザとらしく鼻を摘んだ。弓佳の心には悔しさが湧き上がる。だからといって、敵に対して何かができるわけでもなく――。

「ハアハア、げ、限界だ！」

男達の欲望を受け止めるしかなかった。

破裂しそうなほどに膨れ上がる肉棒が、これまで以上の速さで喉奥を突く。ビクビクと何度も痙攣する肉茎が口唇を擦るたび、口端からは苦汁混じりの唾液が漏れ出た。

「んやっ！」

ここに至って弓佳もペニスの変化が持つ意味を理解したが、総てが遅かった。熱量が上がり、膨張した亀頭が何度も痙攣する。ワレメがパクパクと呼吸するように蠢き――。

「射精るっ！ 射精るうっ！」

どっぴゃああああつ！

「んごっ！ んもおおおおつ！」

大量の白濁液が口腔内に放たれた。

肉茎がポンプのように痙攣し、濃厚な牡汁を吐き出す。ただの射精ではない。数十人の男達による一斉発射であり、口腔は一瞬で噛み切れそうなほど濃い汚液で満たされてしまふ。

「お、おおっ！ んべっ！ に、にがっ！ んぶっ、おええっ！」

口腔を満たした白濁液はすぐに喉奥へと流れ込んでくるのだが、簡単に飲み込めるような量ではなく、逆流してしまった。咳き込むたびに口から牡汁が仮面内に溢れ出す。鼻にも流れ込み、ブピュッと噴き出した。ツーンとした痛みと、すえたような牡の臭いが広がっていく。

（き、汚い！ 何よこれ！ こんな臭いの嫌だ。嫌だよ！）

嫌がってもどうする事もできない。弓佳にできる事は、ただ牡汁を受ける事だけだった。

（溜まってる。溜まってるのにい！）

勃起の根元にマグマのような熱が溜まっているのが分かる。擦るたびに熱量を上げていくのだが、溜まるだけでどうにもならなかった。逆に苦しさが増す。未だ仮面内に残る白濁液を無意識の内に舐め取ってしまったっている事にも原因はあるのかも知れない。

（助けて。助けてよお）

手淫を続けながら、助けを求める視線を周囲へと向ける。すると仮面を向けられた街の人々は、ビクツと身体を震わせた。人々の顔が赤い。皆興奮し、テッカメンから向けられる視線に何か期待している。

（駄目、この人たちじゃ駄目）

何故かそんな事が分かってしまう。魔力を持っていない人間では、この疼きを鎮める事はできない。だから山岸くんでも駄目だ。そんな気がする。

そう、この疼きをこの場にいるものの中で唯一鎮める事ができるものは――。

「な、何見てるんだ！」

メルエルと視線が合う。この黒衣の少女も興奮しきった顔で弓佳の自慰に見惚れていた。だから突然向けられた視線に驚きの表情を浮かべ、焦ったような声を上げる。

「はあ……」

戸惑うデコ少女の姿に、弓佳はゴクリと息を飲んだ。メルエルの肉体なら、この耐え難

い疼きを鎮める事ができるかも知れない。だから――。

弓佳は魔法を発動させる。肉体には魔力が満ち、呪文を唱える必要もない。

「へっ!? わっ! な、なんだとお!」

発動した魔法が黒衣の少女を包み込む。少女は慌てて纏わりついてくる魔力から逃れようとしたが、テッカメンの魔力は強大だった。

力がメルエルの小柄な身体を拘束する。メルエルの両手足が縄で左右に引つ張られているように伸びた。「大」の字のような姿勢で固まる。

「な、なんだこれは! やめろ! ボクの身体を離せよ! ひ、人質がどうなっても構わないのか!」

少女は声を荒げるが、顔は青褪めていく。弓佳にはメルエルの言葉など脅しでしかない事は分かっていた。拘束魔法を打ち破れるほどの魔力を、デコ少女は持っていない。

「だ、だいじょうぶだよ。はあはあ、すすす、すすぐに、きもひ、きもひよくなれるから……おっおっ!」

怯える少女に優しく声を掛けながら、再び魔法を行使する。

「ひいっ!」

少女のワンピースが捲れ上がった。黒いショーツが露になる。更に魔法の効果は続き、下着が溶け、消えた。

「いやあっ！」

秘部が露になる。毛がまったく生えていない、見た目相応の可愛らしいワレメだった。先程までの弓佳の痴態を見て興奮していた為か、うっすらと花卉は濡れ開き、ピンク色の柔肉を覗かせている。

自分が隠してきたものを見られた恥辱からか、メルエルは少女のような悲鳴を上げた。これまでの態度が嘘のようである。

「見るな！ 見るなあ！」

叫び声を上げ、必死に拘束された腕や足を動かそうともがく。総ては無駄な努力となつてしまったが……。

弓佳はデコ少女の見せるそんな弱々しい姿に、更に興奮度を増していた。勃起が硬度を増し、パクパクと肉先が開閉を繰り返す。

（欲しい。この娘が欲しい……）

強烈な肉欲によって、敵に対する憎しみは完全に消えていた。あるのはデコ少女の肉体に対する欲求のみである。

「やだっ！ やめろ！ ぼ、ぼぼ、ボクに近付くな！」

怯えを含んだ言葉が漏れる。先程までの尊大な態度は完全に消えていた。表情の中には許しを乞うような色さえも含まれていたが、暴走状態ともいえるテッカメンには届かない。

それどころか怯えるデコ少女の姿に、より激しい興奮を覚えてしまう。この娘が欲しい。素直なまでの欲求だった。

（ああ、気持ちよさそう。凄く気持ちよさそう）

はあはあと荒い息を吐きながらゆっくり立ち上がると、メルエルに近付いていく。その小さな顔を何度か手で撫でながら、弓佳は立ったまま勃ったままの肉棒を少女の膣口に添えた。

じゅぐつ！

「ひ、ひいつ！」

メルエルの瞳が恐怖に見開かれる。それがまた弓佳の本能を煽った。先程まで命令されるがままに行動していたものとはとても思えない。仮面下の瞳を爛々と輝かせながら、肉孔に擦りつけていた肉先を突き出した。

ずじゅぐう！

「ひぎつ！」

肉先を花弁に押しつけ、小さなワレメを拡張していく。狭い蜜壺の感触が龟头を通じて弓佳に伝わってくる。

「おっ！　せ、せつまい。ほあつほああつ！」

足を蟹股に開き、勃起ペニスを突き出していく。膣壁が肉先を押し潰す。牝としての本

能なのか、肉壁が絡みついてきた。

「きもちいい。おっあっおあっ！」

柔らかく、それでいて牡汁を搾り出そうと激しく締めつけようとしてくる肉壁の感触に、弓佳は仮面下でだらしなく臍を下げながら、より膣奥へ肉棒を突きこむ為ために更に腰を突き出していく。

じゅぐつ、じゅぶじゅぶつ！

人々の目の前で花卉が押し広げられていった。愛液を分泌させるピンク色の媚肉が捲れ上がる。

「生まれ！ 生まれよおっ！ 嫌だ！ ぼ、ボクは、は、初めてなんだ。だから、だから許して！」

デコ少女はポロポロと涙を流すが、弓佳は許さなかった。それどころか、勃起をより硬くする。自分を散々辱めてくれた相手が泣き叫ぶ姿に、加虐心を刺激されていた。

「だ、だつめだよ。い、挿入いれるんだ。ここに、ほおっ、ほおおっ！」

弓佳の肉棒はメルエルの膣に比べてかなり大きい。ペニスペニスが膣奥に進めば進むほど、シミシと関節が痛々しい悲鳴を上げる。

「ひぎっ！ たっすけで、ぼ、ぼつくがわ、悪かった！ だ、だっから、だっからあっ！」
みち、みちみち、ぶぢいっ！

泣き叫び許しを乞うてくる敵。鉄仮面は心地よく叫び声を耳に聞きながら、何の容赦もなく処女膜を突き破った。

「いぎいいいっ！」

破瓜の血が花卉から溢れ出す。痛々しい悲鳴がメルエルの口から漏れ出た。

「すっごい！ もっ、もう何かきそう！ すっごいよおっ！」

膣壁が肉棒を引き千切らんばかりに締めつけてくる。蜜壺の生温かさがペニスから弓佳の身体全体へと広がった。全身が肉襪に包まれているかのよう。このまま永遠に結合していたいと思うほどの心地よさだった。

じぐっ、じゅぼっ、じゅぼろおっ！

「おっだ、だつめえ！ いあっ、ぎっぎっぎっひいっ！」

「おふっおふっおふっ！」

相手は破瓜を迎えたばかりの少女であったが、弓佳は容赦なく腰を振る。現在のテッカメンは本能に抗う術を持っていなかった。

気持ちがよすぎる。この世にこんな快樂があつた事など知らなかった。

半眼、半開きの口のまま、一心不乱に腰を振りたくる。立ったまま繋がりながら、弓佳は淫猥に腰を振り続けた。一突きごとに脳髓が溶けそうになる。肉棒が一回りも二回りも大きくなっていくのが分かった。

カリ首で肉襷を巻き込む。腰を引くとべろべろになった柔肉が外側に捲れ上がった。花弁に一枚一枚が、引き抜かれようとする。ペニスを逃がすまいと、生物のように絡みついてくる。

ぼじゅっ ぼじゅっ ぼじゅっ！

「しまつる。しまつて、しまつて！ おっおっおっ！」

処女地を蹂躪すればするほど、肉根から熱い何かが肉先に向かって湧き上がってきた。その感覚はどこか尿意にも似ている。

(なにこれ！ ああ、何かが来るよ。オシッコみたいなの何か！)

心地よい感覚だった。下腹部に熱が広がっていく。その感覚の先を知りたくて、弓佳はより激しく腰を突き出す。

「ほごっ！ おつき、ぼっくの、ボクのはらっが、やぶ、やぶっれ！ あっあっあーあー！」

受けるメルエルも前後に腰を揺らしながら、辺り一帯に響き渡る悲鳴を上げる。苦痛を伝える悲鳴だが、中には甘い嬌声も含まれ始めていた。

弓佳の肉棒から分泌される先走り汁が、デコ少女の肉体に吸収され始めている為である。強大すぎる精気が影響し、純潔を破られたばかりのメルエルが快楽を感じていた。

じゅばんっ じゅばんっ じゅばんっ！

肉と肉が絡みあい、分泌された液体が水音を響かせる。メルエルの破瓜の血を含んだ愛

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>